

パネルディスカッション

Panel Discussion

2010年3月20日 よみうり神戸ホール

March the 20th, 2010, Yomiuri Kobe Hall

- 林勲男（モデレーター）（実行委員長、国立民族学博物館准教授・総合研究大学院大学准教授）
 - 山本健一（人と防災未来センター副センター長）
 - ドナ・サイキ（太平洋津波ミュージアム館長）
 - ムハンマド・サイデュール・ラーマン（バングラデシュ災害予防センター所長）
 - 坂戸勝（国際交流基金理事）
 - サンジャヤ・バティア（国連国際防災戦略、国際復興支援プラットフォーム）
-
- Isao HAYASHI (Chairman of the Implementation Committee) (Moderator)
 - Kenichi YAMAMOTO (Deputy Executive Director, DRI)
 - Donna SAIKI (Executive Director, The Pacific Tsunami Museum)
 - Muhammad Saidur RAHMAN (Director, Bangladesh Disaster Preparedness Centre)
 - Masaru SAKATO (Special Assistant to the President, The Japan Foundation)
 - Sanjaya Bhatia (Knowledge Management Officer, Secretariat of International Recovery Platform)



Summary

A panel discussion was moderated by Mr. Hayashi, with the above three panelists: Mr. Kenichi YAMAMOTO, Ms. Donna SAIKI and Dr. Muhammad Saidur RAHMAN, and the two commentators: Mr. Masaru SAKATO and Mr. Sanjaya BHATIA

Mr. Yamamoto stated “The young generation can generate chain of Telling Live Lessons by telling their experiences to younger children who may further relay to next generations.”; Mr. Rahman stated “The traditional means of Telling Live Lessons are greatly effective, such as folk songs, folklores and poetries which often appeal strongly to the heart of the local people of developing countries.”; Ms. Saiki stated “Our Museum operates with very little capital but lots of passion, and we have dedicated volunteer” and “It warms my heart that I come here and I can validate what we have been doing all those years of gathering stories because we started with nothing.”

Mr. Sakato stated “The disaster is something very rare to one place, but if we share memories of disasters across country borders, our memory of the disaster can remain for longer time.”; and Mr. Bhatia stated “The efforts for Telling Live Lessons fits very well into the priority number 3 of the Hyogo Framework of Action which is educating awareness of disasters” and “The know-how of museums and the mechanism of Telling Live Lessons are very effective to those countries that are struggling for reconstruction from disasters.”



林



鼎談では個人の経験というものがいかに大切であり、それをどう伝えていくか、どう実際の活動に結び付けていくかということを考える上で、示唆に富む具体的なお話を伺いそれぞれのお話の中に、災害の経験と共にその後の人生を生きていくことの重みを感じた。私は文化人類学を専門として太平洋地域を主なフィールドにしている。その太平洋地域にあるパプアニューギニアで 1998 年に大きな地震津波災害

が発生し、約 2200 名が亡くなった。その被災地に毎年のように入り、復興の様子、将来の災害に対する取り組みを調べている。このパプアニューギニアの津波災害が私の災害研究を始めるきっかけである。

世界の被災地ではさまざまな形で防災、減災、復興の取り組みが行われているが、実際にどのような人が関わり、どのような社会環境でどのような取り組みが行われているのか、なかなかわからない。このパネルディスカッションでは、そうした世界各地の被災地で災害の語り継ぎがどのようなメディアを使っていかに取り組まれているのか、それを担っている組織、主体の連携をどう図っていくかを考えていきたい。

山本



人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の経験と教訓を発信するため、兵庫県が国の支援を得て 2002 年 4 月オープンした。運営にあたっては 150 人のボランティアも参画している。その意味で、市民、自治体、国の 3 者で運営がなされている。

センターの最大の特徴は展示と研究にある。来館者は毎年 50 万人で、半分以上は子供たちである。震災に関する資料 20 万点も保存し活用している。また、約 10 名の研究者を擁していて、実践的な防災研究を実施するとともに、研究員たちが中心になって自治体のトップや防災担当者に対する研修も実施している。大災害が発生すると研究員が被災地に駆け付けるというシステムもある。このような 5 つの機能の連携の下、交流ネットワークという 6 つ目の機能も発揮している。

今日は展示を中心にセンターの紹介をしたい。来館者にはまず 4 階の映像で地震の怖さを疑似体験してもらおう。1 階で語り部の語を聴いてもらうこともできる。3 階はいわゆる地震博物館で、発生直後から復興まで過程を分けて展示している。ボランティアが自分自身の体験と照らしながら解説してくれる。2 階は防災・減災一般の教育フロアで、ここでもボランティアが実演してくれる。この一連の流れで最も重要なのは「自分も災害に会うかもしれない」という気持ちを持つことである。これがなければ結局真剣に防災学習もできない。この気持ちをぜひ持ってもらいたいというのがセンターの方針である。

映像と音で地震を再現している 1.17 シアターは被災者にとっては衝撃的なものであるが、震災を知ってほしいという思いで実施しており来館者の評価は高い。研究員による防災セミナーや企画展示なども頻繁に行われている。周辺の国際機関、地域の教育機関、マスコミなど、さまざまな組織、人々との交流にも努めている。

次に、当センターが現在特に注力していることを紹介したい。震災から 15 年経ち、震災を自ら体験した記憶を持つ子どもがいなくなっている。このような子どもたちに伝えないと震災の教訓は将来に伝わっていかない。このため、舞子高校、読売テレビと連携して、「ユース語り部」事業を実施している。若い語り部が子どもたちに伝えるのである。27 人の若

者に語ってもらい DVD に収録して普及に努めている。この 27 人にセンターの 1 階で直接語ってもらう取り組みも実施している。こうした取り組みにより、震災の教訓が確かに次世代につながっていく手ごたえを感じている。地震当時 3 歳から 17 歳だった子どもたちが当時の自分と同じ年齢の子供たちに語り継ぐ、そうするとまたその子どもたちも次の子どもたちに語り継ぐ、語りが語りを誘発することを期待している。

今の子供たちとあまり年の変わらない若い人たちが当時の自分の目線で語ってくれると、聞き手である今の子供たちにも強い印象を与える。若者の 15 年の変化は大きく、自分自身の成長も合わせて語るができる。例えば、震災当時小学校 1 年生だった女性の話では、震災当時消防士であった父は職業柄災害対応に駆け回っていてしばらく帰宅せず、小学校 1 年生の彼女は「父は家族より仕事が大事なのか」と父を憎んだが、成長して父の仕事の大切さがわかるようになり同じ職業に就くことになったとのこと。あるいは、当時 6 年生だった方の話では、当時自分は目の前で焼け落ちる家を震えながら見ただけであったが、15 年後の今、その時何も出来なかった悔しさを今も心に抱えながら、戦争で本を失ったカンボジアの子供たちに絵本を送る活動を続けているとのこと。

昨年 10 月、インドネシアのアチェ州知事が来館し、「悲劇を次世代が学ぶかけがえのない記憶に変えた神戸の経験に学ばなければならない」との言葉を頂いた。大きな災害を経験したからこそ、センターの趣旨をよく理解して頂いたのではないかと思っている。

ラーマン



まず、このような機会を設けてくれた主催者ほか関係者に感謝する。さて、1991 年のバングラデシュのサイクロンと 1992 年のロサンゼルスハリケーンの強さはほぼ同じであったが、バングラデシュの犠牲者は 30 万人、ロサンゼルスでは 18 人であった。生命財産の損失を招くのはサイクロンなどの規模や強さではなく、社会的、経済的、政治的な要因である。バングラデシュの人口は 1 億 5 千万人、一人当たりの GDP は 600 ドルである。1970 年のサイクロンでは 50 万人が亡くなった。ただ、被災するのは貧しい人たちばかりである。富裕層にとっては復興事業などのビジネスチャンスになる場合すらある。

具体例を申し上げる。ある女性は 47 年前に結婚した当時は比較的裕福であったが 7 回の堤防決壊で土地も家も全て失ってしまった。そのせいで娘の結婚持参金も十分払えず娘の夫は娘とその 2 人の子供を残して去ってしまった。家族の 1 日当たりの収入はわずか 30 円である。また、ある男性は代々漁師である。しかし彼自身が所有する漁具はなく、村の金持ちから漁具を借りて漁を行い漁獲量の半分を借料として収めている。残りの半分も他への販売は許されていない。貧者たちにとっては社会的、経済的、政治的な搾取こそが災害である。バングラデシュで防災に取り組む際にはこのような状況を念頭に置いておかな

いととんでもない間違いを起こす。

国連や国際機関がバングラデシュの貧しい人々の命を救ってくれるわけでもない。ハイチの地震ではクリントン元大統領、国連事務総長、オバマ大統領が支援を表明しているが何か目立って実現したわけではなさそうだ。バングラデシュの人々は何代にもわたって実践してきた伝統的な方法で自分自身の身を災害から守っている。例えば、何もなければヤシの実を浮き袋の代わりにして洪水をしのぐ。かつて日本政府は1988年の洪水の後避難用ボート購入のため多額の資金を提供してくれたが、通常そのようなボートが避難で使われることはなくバナナの木で組んだ筏で十分なのである。洪水の際、ヘリコプターやC130輸送機などから被災地に食料を空中から配布するオペレーションがよく実施されるが、通常多くの家庭では避難する前に食料をポリ袋やポリタンクに詰めて土中に埋めておき、水が引いたらそれを掘り返して数日間食べつなぐ。洪水時に燃料を確保するのは困難であるが、そのような時に備えて通常人々は家畜のフンを干して保存している。

このような生きた教訓を学ぶのは多くの場合家庭であり、特に祖母から母、母から娘へという母系の伝承である。村々の語り部による語り継ぎも広く行われている。バングラデシュでは国民の80%がイスラム教を信仰しており、宗教やその場で語られる民謡や民話、詩も大きな役割を果たす。これらに共通するのは「こころ」である。地域の人々に対する献身の心であり、語り手と聞き手の相互の信頼である。

しかしこれがだんだん廃れつつある。災害支援などで外部から提供される資金の使われ方がバングラデシュの現状に適合していないからである。バングラデシュは、外部からの支援金と、地元の文化を理解しない外国のコンサルタント、総数5万にもものぼるNGOの「洪水」に見舞われている。彼らは現地の人々にいろいろと教えてくれようとするが、これは大きな間違いである。NGOの職員は団体から雇用されその指示に基づいて地域でいろいろと教えようとするが、これも間違いである。人と人との相互の信頼に基づいた情報伝達にならないからである。新しい技術に決して反対するものではないが、必ずしも人と人との信頼関係につながるわけではない。

伝統的な方法で人々の心に訴える防災の知識を語り継いでいくことが大切なのであるが、大量の資金や人が他の方法や活動に使われているため、私が言っているようなことは、まるで堅い壁に向かって頭を打ち付けるようなもの、あるいは津波に逆らって泳ぐようなものである。しかし、それでも私は楽天的でありたい。伝統的な伝承方法を通じて近代的技術と伝統的な災害対応とをうまく結び付けていくことに今後とも取り組んでいくつもりだ。

サイキ

ヒロはハワイ島にある美しい街だが、世界の津波首都とも呼ばれている。海岸沿いにあった市街地は1946年と1960年の津波の後安全な場所に移され、住民の生活も大きく変化した。住民たちは徒に不遇を嘆いて時を浪費することなく生活や仕事の再建に励んだが、1946年と1960年が被災者たちにとって決定的な時であったことは間違いなく、折に触れ



て家族や親しい友人たちと体験を語り合ったものだ。ある時住民の一人が「被災者の体験は貴重なものであり次世代に語り継がれるべきもの、このような歴史から私たちは学ぶべき」と言い出した。時期を同じくしてハワイ大学のある教授が津波の科学と被災体験を収録した本を出版した。そして彼らが話し合って太平洋津波ミュージアムの構想が生まれた。

ミュージアムの運営は地域住民からなる理事会と理事長が担っている。施設は1997年に第一ハワイ銀行から寄贈されたものであり、ヒロ湾に面する津波浸水エリア内に位置している。所蔵する全ての原本や貴重な記録物などは浸水エリア外の安全な場所に保存されている。館内では私たちが喧伝する哲学だけを手元に置き、いつでも避難できる体制でいる。実のところ、実際に津波に遭った年代物の建物が、当ミュージアムに本物感を与えていて、ヒロならではの施設となっている。来館者は年間約1万8千人でその4分の1は外国からである。非営利施設で、入場料、寄付とボランティアの協力などで週6日間の開館を維持しているほか、各種の補助金でさまざまな事業の企画・運営や展示の追加更新などを行っている。

当ミュージアムでは、すべての来館者に津波の発生と伝播のしくみ、津波の恐ろしさ、警報システムの基本を学んでもらいたいと思っている。これによってハワイでの津波の犠牲者がゼロになる。ミュージアムでは津波を実際に体験した語り部たちの体験談も紹介している。来館者には、海面の異常を見たら津波の第一波である事を理解し直ちに避難すべきことを訴えている。2004年夏の来館者から間接的に学んだ別の人が、旅行先のプークェットで12月26日に大津波に遭遇した際にもこの情報が役に立ち、的確に避難できて周囲の人々と共に助かったとのこと。私たちの教育手法がうまく機能している証である。ヒロの土地利用の変化についてはミュージアムでは詳しく紹介していない。ヒロは、かつて人口が集中しオフィスや住宅が密集した賑やかな港町であったが、今は湾に沿ってオープンスペースやレクリエーション施設が広がる地区に変貌した。

ミュージアムでは「科学諮問委員会」が展示内容の開発や出版物の監修を行っている。委員の一人は津波モデルで著名で、ハワイ郡市民防衛局のアドバイザーも務めている。ハワイ大学、ホノルルの国際津波情報センター、ハワイ州市民防衛局、太平洋津波警報センターなどと連携して教育教材の製作や学校での研修への協力なども行っている。また、国立海洋宇宙機構（NOAA）の助成を得て2004年のインド洋大津波の被災地で生存者の体験を記録する事業も実施している。タイ、インドの被災地でささやかな姉妹展示施設も立ち上げた。ハワイ先住民の津波に関する言い伝えの研究、1964年のアラスカ地震と津波の体験者の記録、2009年サモアの津波の体験者へのインタビューも実施している。

ミュージアム設立後に私たちが最初に取り組んだのは津波体験者の体験談収集で、「あなたは津波の体験談を知っているか？」という子ども作文コンテストを後援した。1946年の津波からすでに50年経っていたが、子どもたちが熱心に祖父母や隣人たちの体験談を収集

してくれて驚くほどの体験談が集まり、一般の人々にもはじめて紹介できた。それ以降もイベントや、テープ、ビデオによる体験談の収集を続け、今日までに 400 ものハワイの津波に関するオーラルヒストリーを収録した。

近年は「津波ストーリーフェスティバル」を開催し、インタビューの成果を披露する取組を続けている。2003 年の初回には、1946 年の津波にさらわれて 30 時間漂流した男性の体験談を紹介した。公開の場で体験談を紹介し、他の人々と分かち合うことは津波に対する意識啓発に極めて有効であると、この時に実感した。それ以後も、1946 年の津波で壊滅した「シンマチ（新町）」のことや海岸沿いを走っていた「ヒロ合併鉄道」のことで、1960 年の津波で失われた繁華街「マモ通り」のことや「ワイアケア地区」での生活のことなどの紹介を続けた。1960 年津波から 50 周年にあたる 2010 年には「粘り強くがんばるヒロ」と題して、2 度の津波と第二次世界大戦を生き抜いて今日も元気に活躍しているヒロの個人業主たち、ヒロの不屈の精神の体現者たちの体験談を紹介することになっている。

ハワイでは 4 月は州の津波知識普及月間である。私たちの提案に基づき知事が認可した。今では州及び郡の市民防衛局、NOAA、メディアなどの協力で津波に関する多くの特集記事が掲載されるなど、大変有効な津波教育の機会となっている。今年 2 月のチリ地震に伴う津波は小規模なものであったが、今回初めて津波避難を経験した人々も多かったため、ハワイ郡計画局が普及啓発事業を予算化するとともに、当ミュージアムも住民向けのガイドブックを出版した。そして、津波対応計画の関係者が一堂に会する「津波安全フェア」の開催に至った。

2005 年にはミュージアムの壁を出た展示の取組を始めた。すなわち、35 マイルにわたる道路沿いに点在する 12 の津波災害のサイトを紹介し、被災者の体験談や地域の歴史、1946 年と 1960 年の津波被害の写真などを掲載する小冊子を出版した。冊子は当ミュージアムにて無料で配布している。また、ハワイ州市民防衛局との協力の下、津波の挙動を評価し記録するボランティアの育成と動員のプログラムを実施することとした。先般のチリ地震の際に、全州で避難が行われた時にもそのボランティアがそれぞれの持ち場に配置された。

ヒロのランドマークは「津波時計」である。1960 年の津波の前からあった場所に今もあって第 3 波が街を消し去った時刻、午前 1 時 5 分を指して止まっている。1946 年津波 50 周年を記念して住民が寄贈した「シンマチ記念碑」もランドマークである。1998 年までは毎年かつてのシンマチの住民たちが追悼の集まりを開いていた。ヒロから 25 マイルの距離にあるラウパホイホイ地区では 1946 年の津波で 24 人の生徒と先生が亡くなった。毎年記念日の前後には子どもたちと地区の年長者が式典を開き、体験談を聴き昼食を共にとり公園を掃除する行事が行われている。ヒロ本願寺別院は彼らの生涯を記録するプロジェクトを実施している。日系人たちの生涯での決定的な時はやはり津波と戦争である。彼らの体験談は貴重な歴史として若い世代に語り継がれている。

太平洋津波ミュージアムの運営資金は大変僅かであるが、活動にはたくさんの思いが込められている。多くのボランティアの協力もある。私たちは、私たちの活動がヒロの歴史

にとって大切なものだと考えており、その歴史を来訪者と分かち合っていきたい。この国際フォーラムへの招待を名誉に思うとともに、お礼を申し上げる。

林

次に、国際交流基金の坂戸勝理事と国際復興支援プラットフォームのサンジャヤ・バティアさんからコメントをいただきたい。



坂戸

このような場に出席でき嬉しく思っている。国際交流基金は1970年に設立された。日本と海外の人々との間で相互の理解を進め、信頼感を深めることが使命である。その一環で、防災や災害復興のための国際的な交流、対話も支援している。今回のフォーラムも私たちの日米センターが支援している。私たちが防災や災害復興のための交流に携わっている理由は二つある。一つは、インド洋の大津波にせよチリ地震による津波にせよ災害は国籍を選ばないからである。二つ目は、防災や災害復興には国際的な知恵と経験の共有が必要であるからだ。

私は、今回のテーマである災害の語り継ぎについても国際協力が非常に重要だと思う。災害は一つの地域にとっては稀な出来ごとである。従って当初は災害の記憶は非常に強く維持されるが、それは時の経過とともに風化し薄れていく。我が国の東北地方は50年前のチリの津波で大きな被害を受けたが、その記憶が今現在どのくらい人々の行動にとって本当に必要な記憶として残っているか。ただ、一つの地域にとっては稀なものでも、災害は世界の到る所でほとんど毎年発生している。そうすると、国を隔てて災害の記憶を交換し共有すれば、日々に私たちの災害の記憶が蘇ることになる。世代を越えて災害の記憶を維持していくためには国際的な活動が不可欠だと思う。

国を越えた活動の必要性は私個人も経験した。私は2005年のハリケーン・カトリーナの被害が発生した時に被災地であるニューオーリンズにいた。総領事館の第一の使命は日本人の生命の保護だ。私は洪水の二日後にルイジアナ州の緊急オペレーションセンターで現状を聞くとともに、日本人の保護をお願いしたが、その時担当官が言ったことは一生忘れないだろう。担当官は、洪水の地域にいる人は誰であれ生きていれば片端から救ってまいりますと言われた。被災地では国の違いも民族の違いも肌の違いもないのだ。災害に対しては国を越えた対応が必要であることを象徴しているように思う。

さて、3人にそれぞれ質問する。まずハワイのサイキさん、創意工夫に満ちた語り継ぎの活動、ミュージアムとしての活動に大変感銘を受けた。特に、津波ストーリーフェスティバルという行事を行って、津波という悲劇的な体験をした人からその経験を聞くことを定期的な記念行事にしているということは非常に有効な活動であると思った。ただ、語り部の多くは実際に災害を経験された高齢の方々である。10年後、20年後を考えた場合、この

ような語り部に頼る活動をどう考えるか。

次に、ラーマンさん、言われることはよくわかる。その土地の人々が代々伝えた伝承に満ちた知恵を伝えていくことが大事だと思う。往々にして、外から持てる者が一方的な善意で行うことがその土地の人々の役に立たないことがある。しかし、持てる者と持たざる者がともに活動する、防災や災害の復興のために共に働いていくという道はないのか。

最後に、山本さん、世代を越えた語り継ぎは非常に大事だ。しかし、これは縦方向の語り継ぎだ。水平の方向の語り継ぎについてどう考えているか。すなわち、地理的な広がりである。今回 15 年目のこの催しものを人と防災未来センターとしてどう活かして行こうとしているのか。

バティア

本日の私の立場は二つある。パネルの上では国連の国際防災戦略 (ISDR) の代表である。しかし普段は国際復興支援プラットフォーム (IRP) の業務に携わっている。国際防災戦略との関連で言えば、各国が災害リスクの軽減に取り組むための枠組みである「兵庫行動枠組み」の重要項目の一つが防災教育と防災意識の啓発である。本日のテーマはこれに良く沿ったものであり、災害リスクの軽減にとって大変重要なものである。

国際復興支援プラットフォームは、災害からの長期的な復興に取り組む各国政府や国際機関及び国内機関のネットワークである。人と防災未来センターの展示では、災害直後の衝撃的な状況だけでなく、復旧や復興の過程、そこから得られた教訓などについても紹介されている。これと同様に、国際復興支援プラットフォームも、各国の災害復興の取組から得られた経験や教訓を収集し、他の政府や機関に紹介している。

私からはパネリストや参加者の皆さんにお願いしたいことがある。皆さんの語り継ぎの方法論についてもぜひ語って頂きたい。方法論にはミュージアムもあれば語り部を囲む夜の集まりなどもあるだろう。太平洋津波ミュージアムで実施しているようなドライブ・ウォーキングマップなども興味深い。語り継ぎの方法を確立させるプロセスも記録して頂きたい。このような情報は、長期の災害復興に取り組む国々にとって大変有益である。神戸のメリケンパークでは港湾施設の被災状況が保存されている。これも興味深い。

国際防災戦略では安全な都市の形成に向けた世界的なキャンペーンを実施している。その一環として、語り継ぎのメカニズムを確立させるプロセスについてもご紹介頂きたい。私たちが開催する他の会議でも、科学知識と伝統的な知恵の両方を普及させる方法論を紹介したいと思う。上海万博では災害リスク軽減のための特別セッションも開催されることとなっており、情報提供のための良い機会となるだろう。

サイキ

語り継ぎは家族間でも行われている。年配者が亡くなっても家族で語り継がれていく。実際、語り部の多くは若者である。10 代の若者たちが津波体験を追体験している。しかし、

仮に今後 50 年間津波が来ず経験者が途絶えてしまうとすれば、それはむしろ喜ばしいことだ。そのせいで津波ストーリーフェスティバルを開催できなくても寂しいとは思わない。

ラーマン

持たざる者と持てる者の格差は広がるばかりである。しかし、例外的ではあるが、両者が共通の基盤に立って協力しているケースもある。私が所属するバングラデシュ災害予防センターではもっぱら災害予防やコミュニティの強化に力を注ぐことにしている。そのような分野では貧しい人々も公的な支援にもアクセスでき、リスクの軽減につなげることができるからだ。

山本

まず、できるだけ多くの人々に来館してもらうよう努力している。こちらから海外に向いていくことには限界がある。年間 50 万人の来館者のうち 2 万人は海外からだ。できるだけ丁寧なご案内を心がけている。また、当センターと海外の機関とのネットワークを強化していきたい。現時点では神戸在住機関とのネットワークにとどまっている。今回のフォーラムが良いきっかけになると期待している。

林

バティアさんからのリクエストについてはどうか。語り継ぎの活動をどう立ち上げて運営して普及させていくのか。このような方法論をこれから活動しようとする被災地の人々に対してどう伝えていくか。お考えを伺いたい。

山本

2 年前の四川大地震の時に阪神・淡路大震災の経験や人と防災未来センターの運営のプロセスなどについていろいろとお尋ねがあった。これまでも日本語では資料を整えてきたつもりであったが、その時にかなり中国語にも翻訳した。翻訳は重要だ。

ラーマン

便利な媒体がある。地域の伝統的な知恵に根ざした災害対応や、物事をとり進めるプロセスに関する技術を重視し、このような知恵や技術を双方向で共有するための媒体として、DRH（アジア防災科学技術情報基盤）がある。

林

さらに議論を発展させたい。日常の生活すら困難な地域でも伝統的な災害対応の知識が伝承されているとのことだが、情報化の現在、若い人々や子どもたちは新しいもの、先進的なものに興味を持ちがちだ。日本では、子供たちが大人たちの話を聞くことなど無くな

ってしまった。そこでバングラデシュのラーマンさんに伺うが、知恵を伝えていく伝統的な文化に対して現在の若者や子供たちはどれだけ関心を持つだろうか。

また、同じく伝統的な知識の伝達、伝承に関わることで、ハワイのサイキさんにも伺いたい。ハワイには先住ハワイ人がいてポリネシア文化を担っている。彼らの間では津波に関する知識、津波に対する防災の知識はどういうふうな形で伝わっているのだろうか。

人と防災未来センターの山本さんにも伺いたい。センターには防災にかかわっている JICA の研修生の訪問も多いとのことである。彼らの中には、本国で防災に取り組む中で、なんらかの形でミュージアムという考え方も取り入れていきたいと考える人たちもいると聞いている。海外からの研修生たちとの関係の維持、発展についてどう考えているか。

ラーマン

私は近代技術やハイテク技術を否定するものではない。人々が信頼し合う中で近代技術をうまく活用しながら伝統的な知識や文化、災害対応のメカニズムを伝承していくべきだと思う。イエスかノーかではない。年寄りだけに語り継ぎを委ねる必要はない。

サイキ

大変重要な指摘だ。ハワイ本来の文化や言語、習わしは長い間抑圧されてきたが、1980年ごろからハワイのルネッサンスが始まった。今では人々はハワイの言語や物語に大きな誇りを抱いている。私たちは昔ながらの言い伝えなどを収集するため駆け回っている。災害に関する言い伝えがどれほどあるか私は承知していないが、ハワイの神話では土地



や海その他の自然に関することが多く登場する。ハワイ先住民が多く住むある谷では 1946 年の津波で大きな被害が出たが犠牲者は一人も出なかった。年配の住民にその理由を尋ねたところ「岩が歌うのを聞いたからだ」と答えた。どうやら地域に独自の言い伝えがあるようだ。しかしそれがどの程度失われてしまったのか分からない。

山本

150 人のボランティアのうち 40 人は語学ボランティアであり、海外からの訪問者にも対応できる体制にあると思っている。研究部門としても海外といろいろな繋がりがある。今回のフォーラムを通じてさらに強化していきたい。

林

最後に、本フォーラムへの期待と将来の自分たちの活動に対する期待について一言ずつ

発言をお願いします。

ラーマン

質疑の時間は十分でなかったが、会場の皆さんの表情をみると、本日私が提起した問題について皆さん方もやはり真剣に考えておられるように思い、勇気づけられた。期待を述べよとのことだが、皆さん方がバングラデシュやその他の発展途上国に対して何らかの支援をされようとする際には、ぜひ現地の人々のことを思い、現地の文化を尊重して頂きたい。この会場の皆さんの1%でもそうして頂けたら、今回の私の神戸への出張は成功だ。

サイキ

私は今回ここに来て私たちが長年やってきたことが正しかったことが確認できて心が温まる思いがしている。私たちが体験談などの収集を始めた時には何もなく、私たち自身と話を聞く相手だけだった。ここに来る機会を頂いたことに感謝する。

山本

人と防災未来センターはこれまではいろいろと活動を広げてきたが、これからは逆に絞り込んでいく必要もあると感じている。センターの役割を明確化し活動を絞り込み、その上で他の機関と連携し依存し、合わせてより大きな展開をしていくべきと考えている。その意味で、今回のフォーラムがそのきっかけづくりになるよう期待している。

坂戸

次は今回の参加者の国のどこかでおなじような国際的な対話、語り継ぎの対話ができれば良いと思う。その点で国際交流基金が貢献できるのであれば貢献していきたい。

バティア

フォーラム最終日までに、語り継ぎのメカニズムやミュージアムのノウハウを各国が共有できるような簡単なガイドランスノートのようなものが出来ることを期待している。

林

語り継ぎはさまざまな形でさまざまなメディアを使って世界各地で取り組まれている。それだけにそれぞれが抱えている課題も多様であり、経済的、社会的条件でなかなか思うように進まない活動もあるかと思う。明日は6つのセッションでより具体的な活動について報告していただき、それぞれの意見を存分に交換してもらい、この世界災害語り継ぎフォーラムがネットワークとしてよりいっそう推進していただく方向に向けてほしい。